

栃尾てまり

長岡郊外の栃尾エリアでは、手まりと呼ばれる手づくりの伝統を守り続けている熟練の職人集団がいます。

てまりは大きさも細部のレベルも様々です。一つ一つが手で形作られたままなので、二つとして同じものはありません。一番小さいのはゴルフボールくらいの大きさで、一番大きいのはサッカーボールくらいの大きさになります。てまりの芯は伝統的に大きな蛾の繭に七福神を象徴する七つの種を入れたものです。春先に収穫される珍味であるシダの葉（ぜんまい）から採取した繊維で芯を包み、色とりどりの糸でしっかりと束ねています。てまりを振ると種がガラガラ音をたてます。

てまりの外側は、絹糸を何層にも重ねて巻いたもので、様々な模様やイメージを表現しています。歴史的には、てまりの絹糸は、傷んだ絹糸や織り残しの糸が使われていました。てまりを作るには、かなりの時間と労力と精度が必要です。サイズや使用するパターンにもよりますが、2 時間から 2 週間ほどかかります。

1 つのパターンには 12 個の正方形があります。現在の新潟県に相当する旧越後国では 12 が縁起の良い数字であったことから、この数字は象徴的なものです。十二升のてまりは、子供たちがお腹を空かせないように米を計る箱を積み上げた家を表しています。

栃尾てまりは専門性の高い芸術です。現在、手毬をつくる栃尾てまりの会のメンバーは 32 名しか活動していません。メンバーの多くはご年配の方達です。栃尾てまりの伝統を歴史の中で失わないようにすることを目的に、1983 年に結成されました。

一般的にてまりには、おもちゃタイプと飾りタイプの 2 種類があります。

子供はおもちゃタイプで遊べますが、デコレーションタイプはお守りとして家の中に飾るのが一般的です。どちらのタイプも、制作には同じレベルの注意が必要です。手まりを作る前に、多くの柄の中からどの柄を使うかを考えます。柄によって伝わる意味が違うので、プレゼントとしててまりを選ぶ場合は柄を考えることが大切です。

例えば、鶴と竹の模様は長寿を表しています。一般的には、結婚式や定年退職など、誰かの人生の重要な時期に贈るのが一般的です。梅をモチーフにした紅白の花柄も人気です。開花した蕾は、生まれただけの赤ちゃんへのプレゼントに最適です。

現在、栃尾てまりの会は、手毬の伝統を次の世代に伝えています。

栃尾の小学生は、グループのメンバーに見守られながら、自分で手まりを作る技術を学んでいます。このような若者たちに参加してもらい、栃尾てまりが地域の伝統として末永く盛り上がっていくことを期待しています。